

P199:[一 役者と人気](彼我の差)

《日本の新劇:左圖》・・P199「日本では芝居(新劇の歴史:C)そのものが傳統(D1)も基準(E)も無い無政府状態(D1の至小化=Eの至小化)」。

* P202「新劇(△梓)がいつまでも演劇になれぬ根本的な弱点」⇒「つまり、新劇(△梓)は未だにリアリズム(Eの至大化)を克服してゐない(Eの至小化)ばかりか、それを無視し、恐れてゐる(Eの至小化)といふ事」⇒「日本の新劇界には、『中身の無い』娯楽劇を軽蔑し、[リアリズム(Eの至大化)とは反對の]圖式的なイデオロギー(Eの至小化)や前衛的な表現形式(Eの至小化)にすがつて、それを新劇の身分證明(似非:D3實在感)とする風潮(『固定觀念』)が長く續いた」⇒P202「輕喜劇(△梓:娯楽劇)においてこそ、主題(C')や思想(D1)や獨り合點の氣持ち(D1の至小化)といふ隠れ蓑(D1の至小化)をすつかり剥ぎ取られ、役者(△梓)は丸裸(素の人間)にされてしまふので、リアリズム(Eの至大化)の基本を身に附けてゐない(Eの至小化)と、リアリティーの無い浮上つた作り物(Eの至小化)のせりふ(F)や動き(E)で裸身を隠さうと足掻き(Eの至小化)、その結果、かへつてリアリティーの無さを露出(Eの至小化)してしまひ、觀客を白けさせてしまふ」。

《歐米演劇:右圖》・・P199「藝術にも自ら客觀的基準(Eの至大化)といふものがある筈です。少くとも歐米先進國にはそれがある。その點、日本の劇評位、でたらめなものはない。なぜでせうか。歐米では演劇(演劇歴史C)の傳統(D1)があり、その傳統(D1)が基準(E)を作り、そして劇評家(△梓)はその基準(E)を身に附けた(Eの至大化)専門家だからです。(中略)日本では芝居そのものが傳統(D1)も基準(E)も無い無政府状態(即ち左圖:D1の至小化=Eの至小化)ですから、役者(左圖の△梓)はどうやつても(下手な演技でも=Eの至小化)觀客に責任を問はれない。氣にしなければならぬのは漠然たる人氣だけです[とは即ち、P226「泥臭さ(Eの至小化=唯の癖を個性と取り違へ)が藝の味(D1の至小化)であり、灰汁の強さ(Eの至小化=唯の癖を個性と取り違へ)が役者の魅力(D1の至小化)」と言ふ錯覺に頼る事]]」。

C芝居(新劇の歴史:C)・主題(C)

*「傳統(D1)も基準(E)も無い無政府状態(D1の至小化=Eの至小化)」。
*「思想(D1)や獨り合點の氣持ち(D1の至小化)といふ隠れ蓑(D1の至小化)」。

F...せりふ・言葉。

(△梓)新劇・劇評家・娯楽劇・役者・觀客

*「新劇(△梓)は未だにリアリズム(Eの至大化)を克服してゐない(Eの至小化)ばかりか、それを無視し、恐れてゐる(Eの至小化)」。
*「[リアリズム(Eの至大化)とは反對の]圖式的なイデオロギー(Eの至小化)や前衛的な表現形式(Eの至小化)にすがつて」。
*「リアリズム(Eの至大化)の基本を身に附けて(Eの至大化)ゐない」。
*「リアリティーの無い浮上つた作り物(Eの至小化)」「リアリティーの無さを露出(Eの至小化)」。

彼我の差

演劇(演劇歴史C)の傳統(D1)

歐米演劇歴史(C)

「藝術にも自ら客觀的基準(Eの至大化)といふものがある」。
*「傳統(D1)が基準(E)を作り、そして劇評家(△梓)はその基準(E)を身に附けた(Eの至大化)専門家」。

(F):せりふ

劇評家(△梓)